



ゆずきよ劇場  
芳一の行方

原作 / 小泉八雲「耳無し芳一」  
文・絵 / ゆずきよ

芳一は毎日考えていた・・・

「一日・・・一刻も早くこの寺から出て行かなくては！」

でも、それがどんなに困難な事かもよく解っていた。

「琵琶を奏でる事以外何も出来ない只の殺猪しが  
どうやって独りで生きて行けよう？」



芳一は、毎日このふたつの思いに揺れ苛まれていた。

何故ならば

この寺の住職は、跡取りもなく己の老後の身を案じ  
琵琶を修行する者の中から選りすぐって見付けた盲目の芳一に  
将来琵琶法師として名声を得ても寺から離れられぬよう  
「何不自由ない暮らし」という恩を目々着せ続けていたからだ。

だがしかし、「何不自由ない暮らし」とは名ばかりで  
盲目なのをコレ幸い、と住職は芳一を離れに閉じ込め  
来訪者の前で琵琶の詠唱をさせる時以外は  
風呂も使わず食事も最低限  
自由など存在しない生活を強いていたのだ。

芳一は金づるにするために飼われていたのである。



ある夏の夜  
住職は供の者を連れ遠くの檀家の法要へ赴いた。

寺には芳一がたったひとり。

「これは千載一遇の好機！  
速い事などしてはいいつまで経っても住職の手の平から逃れる事は叶わない！」

「後の事は考えるな！生きていれば何とかなる！  
何とかなるさ！」

芳一は、自分を奮い立たせ  
着の身着のまま大事な経巻だけを持って  
とうとう寺を飛び出した。



右も左も、いったいどの辺りを歩いているのかさえも解らず  
あちらこちらにぶつかり転びながらただただ一心に進んで行った。

ぶつかり転がればもちろん痛い  
月明かりも届かぬような真つ暗な森に迷い込み独り彷徨い続けていても  
元々盲目の芳一、**「恐怖」**という感情に襲われる事は一度もなかった。

「何だ、**「案ずるより産むが易し」**じゃないか」

ひとりでも寺を抜け出せた事に安堵した芳一は  
歩を緩め、今の気持ちを表現するかのよう**に琵琶を奏で始めた。**



それは  
住職の呪縛から解き放たれた  
開放感に満ち溢れた真の芳一の音色であった。

「なんと素晴らしい琵琶の音……」

芳一は一瞬にして凍りついた

「誰だ？こんな夜更けに……もしや寺の者か!？」



はやる鼓動を極き分けながら

芳一は声のしたほうに耳を集中させた。

「おや？お前さん、  
寺の芳一じゃないか・・・」

芳一は益々身をこわばらせ絶望した。

「そうかい、お前さんだったかい・・・  
さてはついに寺を逃げ出して来なすったんだねえ・・・」

男なのか女なのか  
子供なのか大人なのか  
掴みきれない声色に気味の悪さを感じたが  
その柔らかな口調から  
どうやら芳一の敵ではないらしい。



「ここは鬼の通り道」

「こんな夜更けに人っこ独りで歩いていては  
『喰ってくれ』と言っているようなものだ……とにかく付いて来なさい」

森の奥に連れて行かれた芳一は  
おもむろに着物を脱がされると  
体中に筆のような感触が走るのを感じた。

それは同時にあらゆる方向から感じられたので  
先ほど声をかけて来た一人だけではなく  
ここには複数の何者かがいる事を芳一は悟った。

「鬼の目から透れる呪文を  
体の隅々までもらさず書きました。  
これでもうお前さんが  
鬼に襲われる心配はありません。」

「あなた方は何故私を助けてくれるのですか？  
私を知っているあなた方は  
いったいどこのだなたなのですか？」

今夜の出来事に頭が付いて行けぬ芳一はついに尋ねてみた。





「……私達は……」

「……実は、あの寺の無縁仏です。」

お前さんもご存知の通りあの住職は種の仕事です。  
お布施の無い者には手を合わせる事すらしてくれません。  
供養もされず成仏もできない私達にとって  
お前さんの詠明は心の拠り所でした。

だから、お前さんがこうして寺を飛び出てきた今、  
恩返しに住職から無事逃れる手助けをしたいのです！」

「それでは私が居なくなってしまっっては……」  
言いかけた方一を廻り言葉は続いた

「お前さんの今晚を私達に下さい。  
私達のために、最後の聴き納めに  
お前さんの琵琶を聴かせて下さい。  
私達の願いはただひとつです。」

それさえ叶えて下さるのなら夜明け前には必ずお前さんを  
逃がしてさしあげましょう。」

全てに合点のいった方一は迷う事無く了承した。  
夜の闇と同じく、目の前にいる者達が人でない事など  
目の見えない方一には大した意味はなくなっていた。



一方、寺では法要から帰って来た住職が  
芳一の姿がどこにもない事に気がき大騒ぎとなっていた。

「おのれ芳一！  
これまで散々世話してやった



恩も忘れて裏切りおつて！」

寺の者達が止めるのも振り切り

芳一の後を追って

住職は夜の闇へと消え入ってしまった。

森の中を走っていると  
どこからともなく聴き覚えのある琵琶の音色が聞こえてきた。

「そこか！」

―と、住職がいよいよ森の奥へ分け入ろうとした時

「こんな夜更けに何をそんなにお急ぎだい？」

ここは鬼の通り道、

そんなに急いでいたとして鬼に捕まり喰われてしまっちゃあ  
何の意味もありますぬ…とにかくこちらにおいでなさい。」

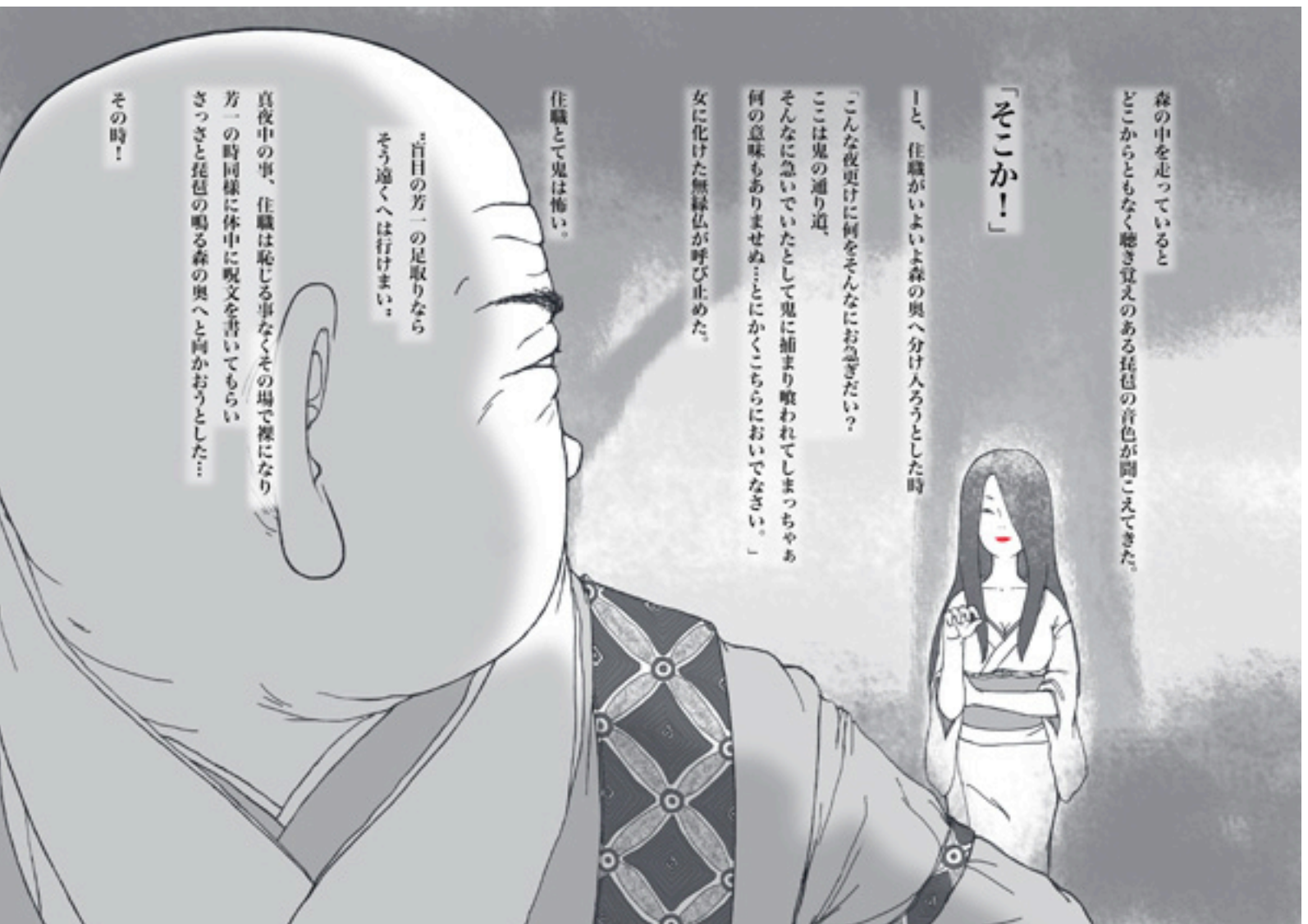
女に化けた無縁仏が呼び止めた。

住職とて鬼は怖い。

「百日の芳一の足取りなら  
そう遠くへは行けまい。」

真夜中の事、住職は恥じる事なくその場で裸になり  
芳一の時同様に体中に呪文を書いてもらい  
さっさと琵琶の鳴る森の奥へと向かおうとした…

その時！



背後から迫って来た大きな鬼に  
両耳を掴まれ捕まってしまった！



女はわざと仕職の両耳にだけ呪文を書かずにしたのだ

耳しか見えない目の前の物体に鬼は目をシロクロさせていたが

掴んだ両耳を引きちぎってみると

生暖かい血の臭いと大好物の人間の叫び声をした。

鬼は物体の感触を確かめるように

目に映らない仕職の体を逃がさぬよう両手でしっかりと包み込んだ。



そこまで見届けた女は

芳一の提包を奪くために

静かに森の奥へと消えて行った！

芳一は寺の無縁仏達のために  
一心不乱に琵琶を奏でていた。

遠くの方で何度か  
人の叫び声のようなものが響いていたが  
誰ひとりそちらに気をとられる者はなく  
芳一の最後の琵琶に耳を傾け  
皆、愛おしそうに聴き入っていた。



夜明け前、約束通り無縁仏達の手引きにより  
方一は雅なく森を抜け町の入り口までたどり着いた。

「仏達の案内はここまでです。

この先、住職がお前さんを追って来る事は  
決してありません。

体の呪文も人には見えやしません、安心なされ。

お前さんは自由です。

後はお前さんの運次第。

好きな所で好きなようにお生きなさい。」

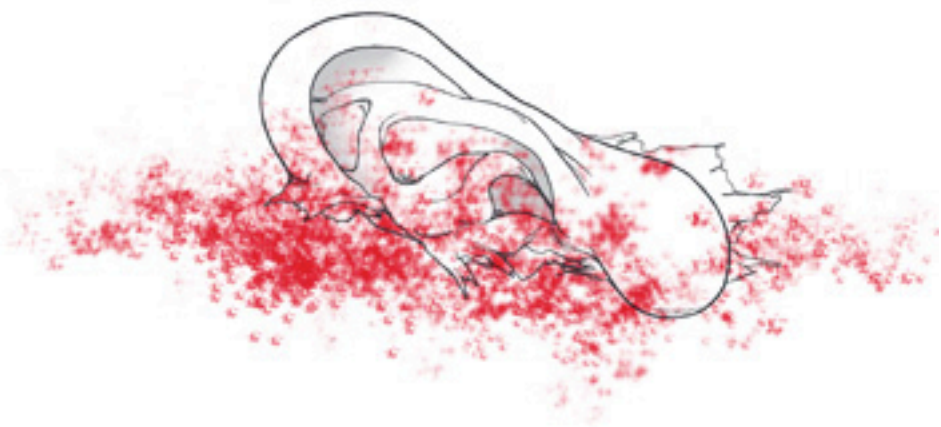
方一は町へ、無縁仏達は森の中へ

それぞれ姿を消した。





夜が明け、寺の者達は  
ひと晩中帰って来なかった住職を探しに森へ入った。  
途中、人の耳らしき物は見付けたが  
住職を見つけ出す事はできなかった。



住職が行方知れずとなってしまうた寺は  
どうにも仕方なく  
しばらく経って新しい住職を迎えた。

無縁仏達はこの新しい住職の  
手厚い供養によって次々と成仏していった。



その後

芳一がどうなったのかは誰も知らない……

